

**愛知県における戦後新教育実践の研究**  
 — 「安城プラン」の成立と展開を中心として —  
*A Study of the Postwar New Education Practice in Aichi Prefecture*  
 — Focusing on Formation and Development of Anjo Plan —

酒井 宏明 *Hiroaki Sakai*  
 (人間発達学部)

はじめに

昭和25年12月、愛知県碧海郡安城町立安城中部小学校（現在は安城市立安城中部小学校。以下「安城中部小」と略す。）は、安城中部小の戦後新教育の集大成として『本校の教育課程—安城プランの構想—』を発表した。当時愛知県において多くの学校によってカリキュラム研究が行われ、さまざまな独自の教育プランが発表された時期であるため、安城中部小が教育プランを発表すること自体特別なことではない。しかし、その時期に教育プランを発表した愛知県内の多くの学校、たとえば愛知学芸大学附属春日井小学校、愛知学芸大学附属岡崎小学校、名古屋市立幅下小学校（現在は「なごや小学校」と改称）などは、愛知県から指定を受けた実験学校であったり、大学（師範学校）の附属学校であった。このような学校のなかで、安城中部小は、実験学校でも附属学校でもなかったところに新教育実践の特色の一つがある。つまり地域の研究伝統校でもなく、そこでの教師は選ばれた教師集団ではなくどこにでもあるごく普通の公立学校である。このようどこにもある地域の公立学校が新教育実践校として活躍できたのはどのような力によるものであろうか。新教育の展開の実態を知る上で重要である。ここで、愛知県下の一般の公立学校のなかでも新教育研究が行われた学校は多くあったが、当時コア・カリキュラム連盟（以下、コア連と略す。）の石山修平、梅根悟らの指導によって、中央の影響を直接受けながら研究を進めていった安城中部小は、愛知県下でも際だった存在であった。

「特別の指定を受けた学校でもない、従ってやらせられているものでもない、見栄を張ろうとするものでもない。只、教育とはどうあるべきものか、子供たちをどう育てたらよいか、子供たちの幸福それのみ念ずる心と心のつながりが、長い歩みをたじろがずコツコツと進ませてきたのである。」<sup>1)</sup>という研究の動機で、研究の指定校でもない、ごく普通の公立小学校であった安城中部小が、「安城プラン」を作成するのである。そして、この安城プランの作成にあたって研究の中心となって活躍したのが、三十代半ばの青年教師稲垣恒次や浅井善一<sup>2)</sup>であった。校長でなく、若い教師らによってその研究が支えられていったところにも、安城中部小の新教育実践のもう一つの大きな特色がある。

このような特色のある安城中部小の研究が、どのような経緯で独自の教育課程を生み出

していったのかを明らかにすることで、愛知県下の新教育展開の実態に迫っていききたい<sup>3)</sup>。また、研究推進の中心であった稲垣がどのように安城中部小の研究推進にかかわっていったのかを明らかにしていきたい。

## 1 研究推進の中心となった稲垣恒次

稲垣は昭和9年3月愛知県師範学校本科第一部を卒業し、昭和10年3月同専攻科を卒業した。師範学校卒業後、小学校教師となるも間もなく出征するのであった。復員後に稲垣は自身の戦争体験を次のように語っている<sup>4)</sup>。

戦いに臨んで当然死すべき運命におかれた私は、美しく死にたいと思う心と、生きたいという生への執着を無理に死へ納得させようとする苦悩・伝統と形式と権威とに押しつけられていたモラルに対する忌憚なき批判が鋭く心に葛藤した。……（略）……終戦により児童の前に師として立てない苦悩は逆に「生きる喜び」人間の最悪の悲惨を再び繰り返させまい。平和と幸福をより強く希求する心となったのである。幼い魂におののく子供たちを人間として真に幸福な子供に育てる事にこそ自分の使命であると自覚したのである。

以上のように、稲垣は戦争体験を通して教育とは「子供たちを人間としてより価値的に高く生きさせることである。」と断言している。戦前の教育を否定し個人を大切に人間教育の視点に立って、教師としての仕事に携わろうと考えていくのである。具体的にはどのような教育を考えていったのであろうか。稲垣は次のように新しい教育について述べている<sup>5)</sup>。

### 1 教育とは人間性の陶冶でなくてはならない

考える事と愛する事、これが人間としての本性である。人間性を忘却した教育は真の教育でもなく人間としての幸福は将来もない。イデオロギーへの教育は人間を道具とし、獣性とし、機械とする。

### 2 教育は平和への道

真の教育は平和につながるものである。教養の高い者程、戦いに於いては悩むのである。平和を希求するのである。教養の低い者程盲従的であり、獸的である。

### 3 自己の信念の確立

日本人は余りにも第三者的なものに依頼的である。宿命的である。例えば神風を希求する如き、自己の心の中に信仰の対象を見出し信仰を生活化しなくてはならない。そして運命を開拓する具体的方策を考えるようにしなくてはならない。

### 4 科学的実証的に生きる人間を培う

信念から発する具体的方策が熱情だけではいけない。科学性と実証性を持つようにしなくてはならない。

科学的実証の上に理論、信念を発見するようにしなくてはならない。

5 教育、特に近代教育は大衆の教育でなくてはならない

貴族主義の教育であってはならない。国民大衆のレベルを上げなくては眞の平和と幸福は将来はない。大衆の教育こそ新しい教育の方向である。

6 時代に生きる新しい性格を形成する

新しい時代には新しい生き方と生活技術が必要である。封建制を打破した民主的な自立的な性格である。

7 行動的な実践人をつくる

軍なる知識の注入でなく、それがガソリンとなって生活を推進していくものでなくてはならない。動的な実践人こそ現代が望むものである。

このような考えを基に、稲垣は戦後の新教育を実践しようとしていくのである。ここでの稲垣の考えは、戦後新教育の出発の原点が述べられていると言ってよい。そして、新教育について端的に次のように述べている<sup>6)</sup>。

新教育とは転変する社会に皮相的に棹さすものでなく、飽くまで眞実なる人間の理想像を探究し、これに向かって躍動する幼い魂を健やかに育てていく昔に変わらぬ道である。

さらに稲垣は、具体的な人間像を次のようにまとめている。

- 1 生活が豊かな人間
- 2 自主的な人間
- 3 プロジェクトする人間
- 4 基礎的な創造智をもった人間
- 5 民主的な人間

## 2 安城プランに至るまで

### (1) 自学自研の研究

安城中部小の新教育研究は「自学自研」の教育から始まった。自学自研で研究を始めることにした理由を稲垣は次のように述べている<sup>7)</sup>。

復員直後半月ばかり栄養失調のため臥していた。このとき考えついたのが、余りにも受動的な教育をまず、自分たちの、しごととして積極的に進んで研究する自学自研の教

育に転回しなくてはならないと考えた。興味も自立的な意欲も湧くであろう。

以上の記述から、自学自研の研究を始めたきっかけは、稲垣の考えが大きく反映されていると言ってよい。

敗戦直後にもかかわらず、昭和21年2月27日には碧海郡内の師範学校新卒者のために「新教育の在り方と自学自研」といったテーマで研究発表を行い、稲垣はそこで5年国語「稲むらの火」を授業公開した。さらに同年3月5日には碧海郡教頭会のために「新教育と自学自研」といったテーマで研究発表会を開催した。ここで稲垣は、5年国語「漢字の音と訓」を授業公開した。このように安城中部小は研究発表会をすることで、自学自研の研究の成果を世に問うていったのである。その研究の一部を示すと以下のようであった<sup>8)</sup>。

〈自学自研のために〉

- ・もっと考えさせる余裕を子どもに与えること。
- ・辞書・参考書で、又実地にしらべる態度を教える。
- ・問題を見出す訓練をする。
- ・しらべたら発表させる。
- ・他人のしらべた事、発表を嘲笑しない。

〈具体的方策として〉

- ・四人組のグループを作り、学校に於いても自学の形態を加味する。
- ・児童文庫に辞書、参考書を備え使用の方法を教える。
- ・「学習の手引き」をプリントして与えた。
- ・学習の方式（各教科に即して）を与えた。
- ・問題づくり、しらべ、発表するようにした。

安城中部小の自学自研を当時の新聞が取り上げ、「伸ばせ自学自研—新教育への真摯な叫び」という見出しで次のように報道した<sup>9)</sup>。

新教育への激しい嵐が西三河にも吹き荒んできた。教育者の中にも教育活動の本質を忘れ自己の生活安定、待遇の改善のみを叫んでゐてそれでよいのだらうか。新教育は一時の流行や反動思想であってはならない。公正なる教壇に立ち児童のための教育に専念する安城第一校の若い二教師の授業を見学。記者は熱のある言葉を聴いてみた。

稲垣恒次訓導談

敗戦のあと小さい心に苦悩をみせんとする魂に一路の暁を与えるもの、それは国語の生きてゐることであり、これこそ文化建設の基盤でなくてはならないと思ふ。僕たちの獲得すべき自由もここにあると信ずる。

## 浅井善一訓導談

受持児童の中には教師よりも遙かに苦しい生活をしてゐる者が数多い。教師はこのことに余りにも無関心すぎ、愛がなさすぎる。これは教師その人の人格の問題で決して新教育の技術の問題ではないと思ふ。僕たちは与へられた法令の下で教科書と教材、きめられた教室、時間割、教師は教へるもの、児童は教へられるものといった固陋な考え方は今こそ一擲し自由な立場で真摯に使命を果たしたい。

こうして広く愛知県下に、安城中部小の教育が紹介されていった。

## (2) ディスカッションの研究

敗戦後わが国で最初の教育問題として提出されたものとして、ディスカッション、討議法とそれに結びついて取り上げられた自治活動があった。両者ともに民主教育の方法を代表するものとして注目されていた<sup>10)</sup>。このような当時のディスカッション・メソッドの流行の中で、安城中部小も昭和21年4月より、自学自研の研究からディスカッション指導へと研究を移すのである。その移行理由を稲垣は次のように述べている<sup>11)</sup>。

自学自研の態度が漸くできてきて、新教育への曙光を見出し、子供たちも始めは一寸どきまぎしたがやがて学習に興味をもってきた。するとこれを発表したい衝動にかられるようになってきた。話し合う事によって楽しくしかも考えをより高く確実にするものである事を発見した。

話し合う事は日本人は上手ではない。しかし学習には大切な形態である。人間的に大切な形態である。

ディスカッションの研究成果として、昭和21年9月「ディスカッションの指導」と題し研究発表を行うのである。そこでの発表の一部を示すと以下のようであった<sup>12)</sup>。

・方策—発表するには内容がなくてはならない。発表したくなる思想を培う事。

## ①学級の形態

- (イ) 独自学習——よくしゃべらせる。
- (ロ) 分団学習——先ず小さいグループで話させ自信をもたせる。
- (ハ) 学級学習——発表する。

## ②学級の雰囲気

- (イ) 人の失敗を決して笑わない。
- (ロ) 下手でもよい。発表する態度をほめる。

・効果——よく発表するようになってきた。

- ①発表したい心になる。
- ②面白いから。
- ③よく分かるようになるから。
- ④みんなに教えてあげたい。
- ⑤ほめてもらえるから。

### (3) 生活指導の研究

ディスカッションの指導はこの発表会で区切りをつけ、昭和21年10月からは、生活指導の研究を始めるのである。その研究を始めた動機を稲垣は次のように述べている<sup>13)</sup>。

ディスカッションの指導をするとつくづく「思想のないものに表現はない」という感じを持った。そして思想を培う事は、生活をゆたかに指導する事である。そこに真に身についた指導ができる。新しい教育は人間の性格指導である。それは生活指導が根本をなす。

更にやがて新しい「社会科」の新設をきく。社会科は現代社会に生きる生活指導でもある。これが準備として、生活科という心持で研究を進めたのである。

ディスカッションの指導によって、子どもたちはよく発表するようになってきたと効果を認めたにもかかわらず、「思想のないものに表現はない」と述べるあたり、かなり強引な研究動機ではあるが、とにかくディスカッション指導の反省と社会科への準備ということで生活指導の研究を進めていくのである。したがって、社会科の誕生により4月から生活指導の研究はすぐ社会科指導の研究へと移っていくのである。

### (4) 社会科の研究

社会科研究を始めてまもなく、昭和22年6月、「社会科の単元」を表1のように構成したのである。多くの学校が新しい社会科についてどのように実践を進めていくのか戸惑いを感じていた時期に、スコープ・シーケンスによって単元を構成していったことは、注目すべきことである。また、この社会科の単元は、当時文部省社会科監修官重松鷹泰、東京第二師範学校小山昌一、中央教育研究所海後勝雄、梅根悟らにその指導を受けた。稲垣は、コア・カリキュラム連盟発足当初から連盟委員となるなど中央とのつながりがあり、稲垣の関係によって安城中部小は、多くの研究者から指導を受けていくのである。そして、昭和22年10月東京第一師範学校で開催された、「全国社会科研究大会」でその実践を報告していくのである。

このように、自学自研の研究から社会科指導の研究に至るまで、子どもの実態に即して真摯に研究を進めていった。研究が少しでもまとまると、夜行列車に乗って安城から東京

表1 社会科単元一覧表

月	四	五	六	七	九	十	十一	十二	一	二	三	
学校行事	入学式 身体検査式 天皇祭	遠足	農繁休暇 田舎入りの記念日 梅至	夏休 土曜休 用	夏休 土曜休 用	運動会	運動会	農繁休暇 明法記念日 大町体育会	冬休 大クリスマス 大クリスマス 大クリスマス	新年 正月	紀元節	修学式 卒業式
社会行事	例花祭	端午の節句 八十八夜	田舎入りの記念日 梅至	土曜休 用	夏休 土曜休 用	村祭	村祭	大町体育会	冬休 大クリスマス 大クリスマス	正月	立節	縦の節 岸句
一年	うれしい がく	わたくし の	せいの もの	わたくし の	わたくし の	たべもの	たべもの	この 島の	わたくし の	わたくし の	おみせ	おみせ
時間	16	6	8	4	4	10	10	12	6	18	10	6
二年	強いからだ	安城えき	じよめう	わたくし の	わたくし の	家のど	家のど	この 島の	ゆうびん	町私 たちの	あおさ	おり ま
時間	11	16	18	2	4	12	12	11	15	15	7	12
三年	青物市場	食糧品	水の使い方	家の畜	(作品展)	乗物調べ	乗物調べ	電気とガス	冬の生活	着物	建物の	お友達
時間	15	12	10	16	4	20	20	10	16	16	16	10
四年	だ私運のから	配給	親しい人々	明治用水	(作品展)	土運の郷	土運の郷	旅行	防火	ぬんり	先祖	町役場
時間	12	15	15	13	4	16	16	15	15	15	15	12
五年	選券	新聞	織物工場	水産物	(夏休発表の研)	郵便局	郵便局	住宅	生楽	の安	ラ	石
時間	15	17	15	8	4	16	16	15	15	15	12	10
六年	生活の設計	健康	明治用水	警察署	(夏休発表の研)	交通	交通	工場	電気	発郷	将日	(小学校を)
時間	12	18	18	2	4	16	16	3	10	15	15	15
八年	(最前在在の責任と任務)											
時間	8											

注) 安城中部小編(昭和25年)『本校の教育課程—安城プランの構想—』p.5の資料より作成

まで行き、梅根悟らに直接指導を受けたことは幾度もあったというように、新教育に対し熱心に取り組んでいったことは、当時の一般校の中では特筆すべきことである。しかし、研究の流れを追ってみると、実にめまぐるしい変化であり、およそ落ち着きのある研究とは言いがたい。次々に変わる安城中部小の研究テーマは、終戦直後摸索状態であった教育界の流れとほぼ一致している。このことは、戦後の激しい教育の時流に遅れまいとした結

果でもあったのではないだろうか。

昭和23年から安城中部小では、社会科の研究から生活カリキュラムの研究へと移っていくのである。全国各地で、カリキュラム改造が叫ばれていたのはこの頃であった。

### 3 安城中部小の生活カリキュラム

安城中部小は、昭和23年2月に行われた社会科研究発表会（テーマは「社会科学学習指導の展開」）後、生活カリキュラム研究を開始するのである。稲垣は社会科研究から、生活カリキュラムの研究への移行を次のように説明している<sup>14)</sup>。

社会科を実践展開していると、各教科に於ける教材と重複するものが見られるようになり、非能率であり、深さがなく平板になり勝ちである。これをすっきり統合した方が深さが加わるように感じてきた。

社会科指導要領補説により単元を整理した。

各教科ばらばらの教育。どれも単元学習として行われようとする傾向にある時、筋金の入った立体的な教科課程を考えねば、人間の性格そのものも筋金が入らないと感じた。

ここに於いて、今までの社会科の単元を基として、「児童の生活経験を単元とする中心学習とこれが基礎的なものとして周域課程を配する生活カリキュラム」に発展したのである。

以上の説明のように、単元構成のよりどころとして『社会科指導要領補説』を取り上げ、その単元を中心学習と周域課程に分けたのであるが、補説の発行が昭和23年9月15日であったことから考えると、補説発行と同時にその影響を受けたことが分かる。また、稲垣がコア連盟の委員であったり、安城中部小も連盟発足当初からの加盟校であったため、コア連のカリキュラム構成の考えに大きな影響を受けた。安城中部小が昭和24年3月に「新しい教科課程」と題し世に問うた、中心学習と周域課程を配する生活カリキュラムは当時のコア連のカリキュラム構造案と一致していることからその影響があったと考えられる。

この安城中部小での新教育研究会は、昭和24年3月5、6日の2日間にわたって開かれた。その時の講師であったコア連委員長の東京文理大学教授石山修平の指導が研究の方向性に大きな影響を与えたと思われる。この2日間の研究会で、全学級が「コア学習」を展開し、石山修平が講演、指導を行っている。この研究会を境に、本格的にコア・カリキュラムの作成が始まったと考えられる<sup>15)</sup>。

コア連のメンバーであった広岡亮蔵は、雑誌『カリキュラム』において、コア連のカリキュラム構造を3期に整理している<sup>16)</sup>。第1期の構造は、昭和22年から23年の「中心課



程と周辺課程」、第2期の構造は昭和24年から25年の「中心課程と日常生活課程と周辺課程」、第3期の構造は昭和26年から27年の「三層四領域」である。すなわち、下から「生活実践課程・問題解決課程・基礎習得課程」の三層が、それぞれ四つの領域「表現・社会・経済（自然）・健康」に分けた構造、というように整理している。

安城中部小の生活カリキュラムは、コア連第1期のカリキュラム構造に位置づけられる。そして、コア連のカリキュラム構造第2期に入る昭和24年8月、安城中部小も幾度かのカリキュラム修正の後、第2次生活カリキュラム（これがいわゆる「安城プラン」である。）を完成するのである。

今までの研究のどのような反省から安城プランが生まれたのであろうか。昭和23年2月からの生活カリキュラム研究の反省として次のような点を挙げている<sup>17)</sup>。

- ①行事をその他で時間が足らなくなり、単元を全部マスターできない。
- ②主単元だけに中心課程を整理して、副単元的なものは別のコースをつくりたい。
- ③基礎課程を充実し、時には中心課程とは別個に気楽に流していきたい。
- ④基礎課程を無理に中心課程にこじつけていたが、もっとすっきりしたものになりたい。
- ⑤ソースユニットが是非ほしい。

以上のような反省から、安城プランでは次のように改定された。

- ①中心課程を主題のみにすっきりさせた。そして、一ヵ年五単元位にした。
- ②日常生活課程のコースを流し、今までの副単元的なもの、行事などをここに統一、機動的に流すようにした。
- ③基礎課程は中心学習に直接関係のある関連課程と、論理的に系統的に流していく系統課程とに分け、今までより一層強く流すこと。
- ④学校で基底単元を作り展開単元は各自作成する。

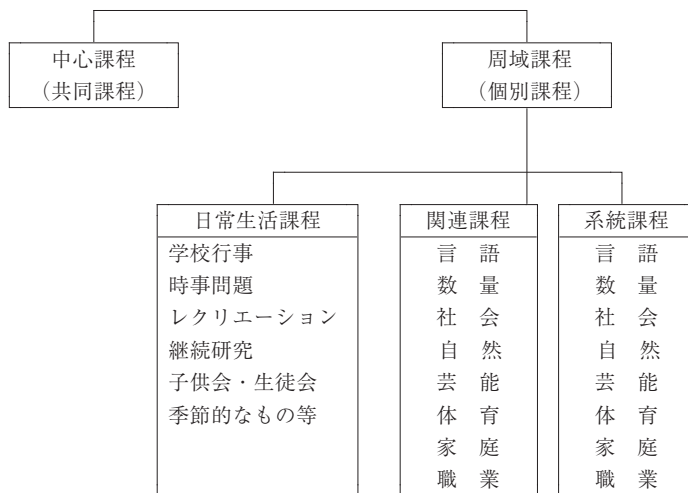
こうして、昭和24年8月に生まれた安城プランでは、中心課程、日常生活課程、基礎課程というように三課程とし、基礎課程はさらに、中心学習との関連で行われる関連課程と中心学習・日常生活学習と関係なく学習し児童の発達段階から考えた系統課程とに分けたのである。この三課程に分けたカリキュラムは、広岡の整理したコア連の第2期のカリキュラム構造案とはほぼ一致している。ここで、安城プランとコア連の第2期のカリキュラム構造案とを比較し表に示すと表2のとおりである。安城プランは、昭和24年3月に示した生活カリキュラムと同様、コア連のカリキュラム改造の流れと一致している。

コア連からの影響を稲垣の次のような記述からも理解できる<sup>18)</sup>。

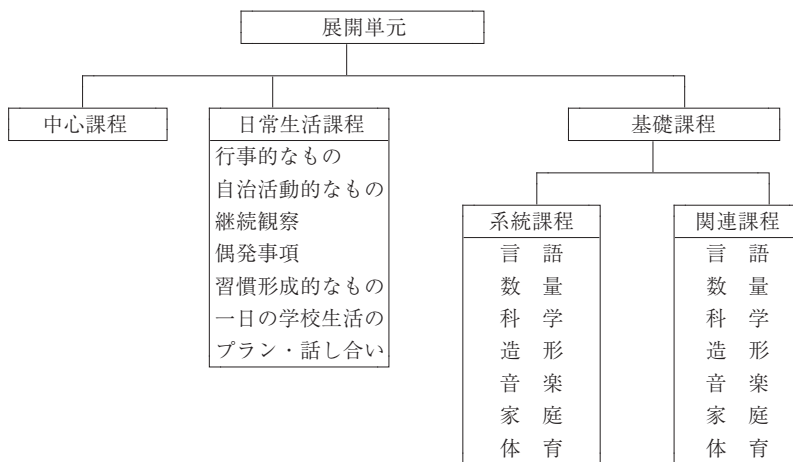
連盟の「基準となるカリキュラム構成の手続き」大いに役立った。今では訂正したプランのもとに日々実践にいそしんでいる。……（略）……基礎課程の分類（連盟案の系統課程）は本校以前とよくにているのでそのままとした。しかし「自然」では物象が入

表 2

1949年8月 コア連夏期大学に示されたカリキュラムの構造



1949年8月 安城プラン



らないような感じがするので常識的な「科学」がよかろう。理窟を言えば切りはないが誰にも分かる方がよかろうということになった。芸能は内容的に考えると開きがあるので本校プランのまま造形と音楽にはっきり分けた。「社会」は本校のプランが社会科の生長であるため中心課程の中に基礎は包含されているので省くことにした。

安城プランの「学習単位」は表3のように定められ、その単位は「展開単位」へと具体化され、学級担任がそれをもとにして実践していくのである。

ここで6年単元「生産と交易」の授業の様子を稲垣は雑誌『カリキュラム』で次のように記録している<sup>19)</sup>。

表3

三	二	一	一二	一一	一〇	九	七	六	五	四	月	單元一 覧表  昭和二四・九・一
ベ	おうちしら		ごっこ	やおやさん	ごっこ	のりもの	んごっこ	おいしゃさ	だち	先生とお友	一年	
	手紙の旅		物	私たちの食	駅前通り		る人々	守ってくれる	私たちを		二年	
	大昔の人々		し	動植物と私たちのくら	安城の駅				私たちの町		三年	
	ねんりよう		市場		昔の旅と今の旅		明治用水		町役場		四年	
	住居の研究			衣服の発達	国土めぐり		りかわり	食べ物のうつ	健康な生活		五年	
	世界の国々			生産と交易	気象と生活		新聞とラジオ		明るい自治		六年	

注)『本校の教育課程—安城プランの構想—』p.12の資料より作成

秋の陽は柔かくガラス戸越しに花瓶にさした菊にあたって教室をほのかに明るくしている。

参観の先生方が大勢つめかけてみえる。正面にはB紙四枚張りの大きな「安城の工場分布図」が張られている。クラス全部の子供たちがそれぞれ手分けし、長い間かかって調査し、まとめあげたもので今しがたでき上がったのである。その左にはこれも同じ位の大きさの、子どもたちの書いた「日本地図」が無造作にピンでとめられている。

单元「生産と交易」の一コマである。「安城にはどうしてこんなにたくさん工場ができたのだろう。」から発展して「我が国の工業の盛んなところはどこか、それはどうして発達したのか。」に進んできたのである。

「そうそう、四つの大きな工業地帯がありますね。するとこの大きな地図でいうと名古屋工業地帯はどこかな。地図でさがしてもらおうか。」

これから作り上げていく黒板の大きな白地図に一齐に目がそそがれる。と反射的に殆どの手が上げられた。中には机からおどり出して印をつけようとしている子もある。ふと右の窓ぎわをみると遅進児であるH君がニコニコしながら手を上げている。

私は嬉しくなってさっとH君を指した。H君はにやにや笑いながらやってきて、あちらこちらと首をまわしていたが急に「ここです。」オクターブ高い声で東京あたりを指して、いつのまにか自分の席へ帰ってしまっていた。「ここかな。」みんなの方を向くと「違う、違います」という。と突然「Hさん、もっとよくみると分かるわ。」「もっと落付いて考えれば分かるよ。」激励の声であり、まなざしである。私はその友情をひしひしと胸に感じた。

白地図だし、大勢の先生がたくさん見えるのでH君いささかあわてたらしい。「よしよし、もう一度、今度は先生と一緒に見るからね。H君なら大丈夫分かるよ。さあもう一度でていっちゃい。」

頭をかきながら出てきた。私は中腰になってH君の両肩をもち、そっと地図の方へ向けてやった。「安城はここだね。安城から東か北か、それとも南かな。」

目をくるくる廻していたH君「先生！ここ。」と嬉しそうに顔を見上げた。と同時に教室にパチパチと拍手が起った。参観の先生までうっておられる。H君は歌手がアンコールにあって嬉しそうな、面はゆいような顔つきで会釈するように、ニコニコしながら今度は悠々と自分の席に帰っていった。

## おわりに

安城中部小の一連の研究に刺激を受けて、安城南部小学校では「安祥プラン」を昭和24年に完成している。このように安城プランは地域の学校に影響を与えている。その安城プランも先に述べたように、コア連に大きな影響を受けていたのであった。また、安城プランの作成に多くの部分が稲垣の力に負っていたと言ってよいであろう。稲垣は、愛知県岡崎師範学校でデュイーを学び、教育実習を岡崎師範学校附属小学校で行い、生活教育の影響を受けるのである。こうしたことから戦後新教育をいち早く実践できたのである。しかし、言うまでもなく、若い稲垣一人の力だけでなく、校長や他の教師の力を無視することは出来ない。

昭和26年4月、稲垣は当時東海北陸実験学校であった碧南市立新川中学校へ教頭として栄転しそこでの研究テーマである「生産教育」の研究の中心として活躍していくのであった。昭和28年5月に開催された愛知学芸大学附属岡崎中学校の研究会では、西三河実験中学校共同研究代表として「中学生に望むパーソナリティー」と題して発表している<sup>20)</sup>。そしてその後、稲垣は碧南市立南中学校長となり昭和50年3月教員生活を終えるのである。一方安城中部小は、昭和25年12月安城プランを発表した研究会以降今までのようなはなやかな研究会は途絶えてしまった。その研究会の5年後の昭和30年11月には愛知県教育委員会から研究指定を受け、体育研究で研究会を開催したのである。しかし、安城プランの構想をふまえた実践はどこにも見当たらなかった<sup>21)</sup>。

## 註

- 1) 安城町立安城中部小学校『本校の教育課程—安城プランの構想—』（昭和25年12月）p. 3
- 2) 稲垣は昭和9年3月に愛知県師範学校本科第一部卒業、同年4月に専攻科に進学、昭和10年3月専攻科を卒業する。浅井は稲垣の師範学校と専攻科のそれぞれ一年先輩にあたる。
- 3) 本研究の先行研究として、主として安城プランの資料紹介となっているが、寺本潔「愛知県における戦後初期の社会科実践「安城プラン」の成立について」（『愛知教育大学研究報告、35（教育科学編）』（昭和61年2月））がある。
- 4) 稲垣恒次『新教育建設五ヶ年の歩み』（昭和25年2月）p. 1
- 5) 同上 p. 1
- 6) 7) 8) 同上 p. 3
- 9) 中部日本新聞（昭和21年3月5日）
- 10) 海後宗臣『新教育の進路』（明治図書、昭和26年2月）p. 25
- 11) 12) 13) 前掲書『新教育建設五ヶ年の歩み』（昭和25年2月）p. 4
- 14) 前掲書『新教育建設五ヶ年の歩み』（昭和25年2月）p. 5
- 15) 安城市教育研究会『安城市教育研究会三十年誌』（昭和57年9月）p. 29
- 16) 広岡亮藏「カリキュラム構造の発展」（コア・カリキュラム連盟『カリキュラム』昭和27年3月号）pp. 26-29
- 17) 前掲書『本校の教育課程—安城プランの構想—』（昭和25年12月）p. 6
- 18) 稲垣恒次「安城プランの前進」（コア・カリキュラム連盟『カリキュラム』昭和24年10月号）pp. 40-41
- 19) 稲垣恒次「随想二題」（コア・カリキュラム連盟『カリキュラム』昭和25年10月号）pp. 58-59
- 20) 愛知学芸大学附属岡崎中学校研究紀要『生活教育研究3』（昭和28年5月）pp. 18-19
- 21) 安城中部小学校研究会資料「団体的活動の指導を中心とする本校の体育研究—1955—」まえがき p. 3